

一外国人滞在者の震災体験記

ティモシー ザイマン ラウエ・ランジュバン研究所
Timothy Ziman Institut Laue-Langevin, France



東京大学小石川植物園のニュートンのリンゴの木の前で

3月11日、大地震が東日本を襲った時、私は先端基礎研究センターの3階に居ました。強さが只事でないことはすぐに分かりましたが、何よりもずいぶん長い間揺れていたような気がします。建物が倒壊するような危険は感じられなかったものの、物が落ちる音があちこちから聞こえました。棚のものはことごとく床に散らばり、プリンターなどの重いものでさえも落ちてきました。中にはひどく怯えて震えている人もいましたが、このような状況の中でも多くの人が、落ち着いて建物から避難していました。建物の外の私たちにも他県の方から情報が入りはじめ、東北地方での被害はさらに大きいようだとなりました。私たちのいた建物は一見損傷がないように見えたが、地面を見ると建物自体が地盤から少し浮いていました。

様子が少し落ち着くと職員たちは帰宅し始め、私たちも多少の食料と水を手に入れてから宿泊場所に帰るようアドバイスされました。コンビニは窓ガラスが割れ、停電しているにも関わらず営業しており、サンドイッチと水を買うことができました。道路や阿漕ヶ浦クラブの損壊を目の当たりにしながら真砂国際寮へ戻ってみると、私たちは村松コミュニティセンターへ避難せざるを得ないことがわかりました。毛布とわずかな身の回りのものを持って、以前日本語レッスンに通ったこともあるそのセンターに向かって歩いて坂を下りました。そこはすでに避難してきた人々でいっぱいでしたが、畳の部屋の一角を与えられ、マットレスと水と非常食をもらいました。まだ時差ボケが残っていたことと、何度も襲ってくる余震のせいで、その日は寝ていても度々目が覚めましたが、互いに励まし合い、たくさんの人と一緒にいる心強さは、狭さと寒さを補って余りあるものでした。夜中に外を歩いてみると、ヨーロッパの大学院生たちがにぎやかにボランティアの人たちと飲んでいました。

翌朝、真砂国際寮に戻ってみると、グループの同僚や、ここに住むJ-PARCニュートリノプロジェクト(T2K)の大学院生に会うことができました。携帯電話を借りてフランスにいる家族にメールを送ってようやく、彼らが日本の状況をどんなに心配していたかということに気がつきました。あちらでも、津波の惨状と原発の事故についてかなり詳しく報じられていたようです。コミュニティセンターは人が多くなりすぎていたので、私たちは真砂国際寮にすることにしました。グループの秘書の家族が、自宅の冷凍庫にある食材を放出してバーベキューパーティをしてくれたので、私たちも自転車で向かってそこに加わりました。このような惨事の最中におかしなことかもしれませんが、太陽の下でのバーベキューパーティは私たちに和やかなひと時を与えてくれました。電車を利用して空港まで行こうとしましたが、東海駅に行ってみると、すぐにそれが楽観的過ぎるものであったことがわかりました。公衆電話で国際テレホンカードが使えず困っている学生を手伝っている間、後ろに長い列をつくって順番を待つ人々の冷静さに、私はあらためて驚かされました。

真砂国際寮に戻ると、スタッフと滞在者が食事の準備をしていました。幸いにも学生たちは食べ物をたくさんストックしており、集めた枯れ木の火で大鍋にはすぐに2、3日分のスープとヌードルが出来あがりました。また、私たちにはトイレ用の水をバケツで汲みに行く仕事がありました。京都から来ていた長村教授と、近所の農家のポンプ用ディーゼル発電機を動かすのを手伝った際に仲良くなった方々からは、お返しに採りたての“daikon”(大根)をもらいました。夕食には20人程が集まり、懐中電灯で照らされたテーブルでとりました。真砂国際寮は、東海村の外から来ていた人たちにとっての難民キャンプのような役割を果たしており、ラジオから常に情報を得ることができる上に、日曜には親切にも新聞記事を外国人のために翻訳したものまで置いてありました。しかし、写真がなにより東北の惨状を物語っていました。

日曜日の夜、ニュートリノのグループはヨーロッパへ戻るためにつくばへ避難して行きましたが、彼らの

本心はむしろ残って装置の修復を手伝いたかったようです。月曜日に前川センター長と話し合い、私たちが翌日タクシーで水戸へ、そこからバスで筑波へ向かい、東京大学物性研究所がある柏まで行くことに決めました。交通渋滞と給油の長い列もいとわない日本のドライバーたちの我慢強さには心を打たれました。また、茨城や福島の被災地から避難しようとする人たちの足元をみるような行為が見られないことも印象的でした。筑波に着くと、電車が節電のために夜まで運休しているようだったので、タクシーを乗り合わせて柏に向かいました。物性研究所に着いて、未だ電気の戻らない暗闇の中でゲストハウスの鍵を受け取り、私たちは5日ぶりの熱いシャワーを浴びたのです。

それから普段通りの生活に戻ってはいいたものの、二日後、震える大地 (terra firma) を離れ、飛行機の機体の安定感に思わずほっとした感覚は忘れられません。

Ziman氏は、平成23年3月14日～17日に開催される予定であった「第2回ASRC国際ワークショップ:磁性材料とナノ構造」の実行委員長を務めており、準備のため事前に来所して地震に遭遇した。なお、本ワークショップは平成24年1月10日～13日に延期して開催される予定である。

※本体験記は、Ziman氏が執筆した原稿を翻訳したものです。

ロスアラモスに滞在して

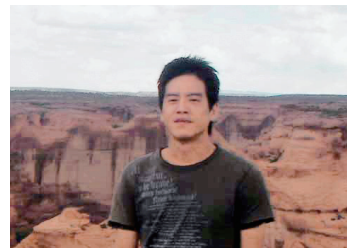
中堂 博之 力学的物質・スピン制御研究グループ
Hiroyuki Chudo Research Group for Mechanical Control of Materials and Spin Systems

2011年7月から2ヶ月半、米国ロスアラモス国立研究所のJ. D. Thompson博士の研究グループに滞在し、強相関化合物・スピントロニクス薄膜の核磁気共鳴(NMR)実験を行ってきました。この出張の発端は3月11日の東日本大震災で、当時Thompsonグループに滞在中の安岡弘志先生(元先端研センター長)が、日本ではしばらく実験はできないだろうと心配して、夏の間、ロスアラモスで一緒に実験をしないかと声をかけてくださったことです。

渡米2日前、ロスアラモス近郊で山火が発生し、ロスアラモスの町に避難勧告が出されました。雨さえ降れば早々に鎮火するだろうとの見込みから予定通り出国することにし、アルバカーキのホテルでしばらく待機することになりました。一週間後、山火は収束していませんでしたが、ロスアラモス周辺部の避難勧告は解除されました。早速町に入りましたが、入居予定であったアパートのオーナーが避難から戻っておらず、しばらく安岡先生のアパートにご厄介になりました。避難勧告解除とはいえ、ロスアラモス付近の山の頂上からは煙が上がるのが見え、夜には山が真っ赤に見えました。

そういう状況でしたが、渡米2週間後には無事に実験を始めることができました。複数のNMRスペクトロメータを用いて、安岡先生と独立に測定を行いながらも、お互いの実験方針や実験結果の解釈等について議論し合って実験を進めました。また、NMR測定結果について試料合成や巨視的物性評価の専門家と頻繁に議論し、比熱や帯磁率の再測定が必要となった時や、試料に問題があった時などは、直ぐに対応してくれ、問題解決までの時間が非常に短いことが印象的でした。ほぼ一対一で安岡先生というNMRの師範と多くの時間を過ごし、また、世界的に著名な研究者たちと共同で研究を進めることができ、非常に充実した日々を送ることができました。

この2ヶ月間、NMR実験に没頭できたのも、この出張に際して尽力して下さった多くの関係者のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。



アリゾナ州キャニオンド
シェリーにて